

【巻頭言】

50 年後のために木を植える

種村 文孝

「祖父が植えた木を切る。その木を加工して木材にする。そして、孫のために木を植える」と、林業に携わる人が語ってくれた。フィールドで出会った忘れられない言葉の一つである。木を植えてから伐採まで 50 年。そのような時間軸がフィールドには流れていた。後継者不足に加えて、木を植えて、枝打ちから加工まで一連の技術を継承するには課題がある。1 年、1 年、杉の木の成長に合わせて、葉の量を調整するように枝打ちをし、残す枝と残さない枝を見極めていく。1 年の杉の成長を見ながらつかんでいく感覚もある。

ESD として、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動が指摘されているが、長期的な時間展望を持つことは容易ではないと思わされる。数年先だっただうなっているかわからないのだから。IT 技術の進歩、医療の進歩、働き方の変化、仮想通貨、国際情勢などの変化に目を向けるとき、50 年後がどうなっているかは想像もつかない。そうやって、長期的な展望を考えること自体を避けがちなのかもしれない。林業の時間軸にどきりとさせられたのは、頭ではわかっていながらも、どこか長期的な時間軸を持つことを避けてきた自分と向き合わされたからなのだろう。

50 年後のことを考えて木を植える人がいる。そして、もっと長い時間軸で考えて、自然や文化や教育などのために実践をしている人がいる。大学生がそのようなフィールドに接して、林業のことを考えたり、林業の人材育成について考えたり、地域づくりについて考えたりした時、時間軸の違いは鮮明に現れるものだ。せいぜい数年の時間軸で考えるものが出てくる程度である。これまで自分が生きてきた時間より長い時間というのは想像するのも難しい。だからこそ歴史から学び、フィールドから学び、先人の語りから学んでいくのだけれど、フィールドに出てみるとそんなあたり前のことに気づかされるのであった。

沖縄で出会った人、島根県の手取町で出会った人、カーディフで出会った人。様々な語りや接する中で、長い時間をかけて育まれてきたものと、それに対する愛を受け取ってきたように思う。それらは、書を読み、インターネットと向き合うだけでは得られなかったものであり、今日もフィールドで育まれているものである。

フィールドで学んだ知の巨人としては、南方熊楠のことが頭に浮かぶ。2017 年は南方熊楠生誕 150 周年であったが、彼の仕事は 50 年と言わず、今でも輝きを放つものであろう。西洋的な近代科学の知識を持ちながらも、東洋の思想も踏まえ、枠組みを超えるような発想でフィールドを生きてきた人であった。フィールドと知に向き合う姿勢から学ばされることは多い。

様々なフィールドで、まだ注目されていない知や営みが眠っており、自然と受け継がれていることも多々あるだろう。生涯教育がカバーする範囲はあまりに広く、研究をして何かを明らかにしたところで、大きな山に木を 1 本植える程度のこともかもしれない。それでも様々

種村：50年後のために木を植える

なフィールドを舞台に、後の人の豊かな気づきにつながる研究が 1 つでも生まれ続けていくことを願ってやまないのである。